新しい啓示からみた中国と日本における道徳教育の歴史的ルーツ

マリリン・ヒギンズ

この研究論文は、中国またひいては日本における道徳的考え方の根源とその展開を、中国歴史5000年における概観とハイライト（顕著な出来事）を提示するものである。仏教に多少触れてはいるものの、論旨は孔子とその教えに焦点があてられ、それが易経(The Book of Changes)紀元前2500年の中国の古典；五経の一つ)にまでさかのぼる歴史的な関連が明らかにされているのと、中国ならびに日本での孔子の教え（儒教）の広がりが歴史的に明らかにされているところにある。 深遠で今なお存立しうる真実を単なる宗教的伝承や迷信から区別するための手がかりとしてバハオラ啓示を用いながら、私のプレゼンテーションが歴史的・精神的な探求への興味をかきたてることを望むものであり、中国の宗教文学に述べられているすばらしい教えを学ぶために、読者を“主の宴”へ招待するものである。

仏教と恩恵と祝福の概念

林 彬子

バハイの聖典や祈りの本には、恩恵、恩寵、御恵み、恵沢といった言葉が多用されている。日本人にとって恩恵、御恵みは何とか判るにしても、恩寵、恵沢は普段使われることも少なく、文字から来る意味はわかっても、その言葉の違いや意味が実感としてピンとくるものではない。自然の恵み、恩恵とは言うが、神仏の恩恵とは言わない。

そもそも日本人にとって恩恵とは「棚からぼたもち」という意味での恩恵であり、労せずして思いがけない幸運にめぐり合うことである。耐えがたい苦難、不慮の死、自然災害の犠牲といった災難さえ恩恵と見なしている、バハオラの言われる恩恵とは意味がだいぶ違っているようである。

西洋では、恩恵に類する言葉が多く使われているようである。日本にこの種の言葉が少ないということは、仏教にその概念が少ないからだろう。そこで、これらの背景を探ってみたいと思う。

仏教の基本的概念

仏教は輪廻やこの世の人生の苦からの解脱を目指して悟りの方法を求めている。

縁起の法：全ての存在は空間的、時間的に相互関連し、因果関係にある。

苦の解決：苦は縁によって生じる。

空：　　万物は全て因縁によって起こる仮の相で、実体がない。

諸行無常：全てのものごとはいつまでもそのままではいない。

諸法無我：物事には、固定的、実態的な本体（我）がないということ。

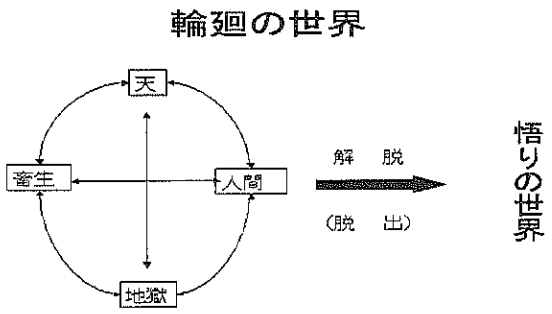
一切皆苦；輪廻のこの世そして人生は苦しみに満ちている。

輪廻転生：インドの古くからの生命観で、過去、現在、未来にわたって生死を繰り返し、この生死の輪廻は苦悩に満ちているとされる。

四苦八苦：生老病死、愛別離苦、怨憎会苦、求道得苦、五陰盛苦

四諦：４つの真実

苦諦：四苦八苦
集諦：苦しみには原因があるという真実。渇愛、無明。



滅諦：苦しみの原因である渇愛、無明を滅ずれば、苦しみはなくなる。
道諦：渇愛、無明をなくすための道。
八正道　　正見（正しい見解）
正思（正しい思考）
正語（正しい言葉遣い）
正業（正しい行為）
正命（正しい生活）
正精進（正しい努力）
正念（正しく記憶に留める）
正定（正しく精神統一すること）

これらの八つの正しい道を行えば、人は必ず、我のなくなった状態、すなわち涅槃（ニルヴァーナ心の平安）に達する。これは後で述べるバハイのこの世での精進の思想と同じではないだろうか。

日本の仏教では恩恵という言葉を使ってはいないが恩恵の概念が全くなかったわけではない。

仏教は創造の神を説いていないが、永遠なる根源を説く思想が現れた。法然（浄土宗）は絶対者の側からの恩寵、他力を強調した。大乗仏教には明らかに「恩恵論」的な思想が見られる。まず、悟りを得ようと思い立つ菩提心でさえ、それが起きるのは個人個人の心の中であっても、それを起こすものは常に個人を超えたところにあるという思想が見られる。

特に浄土真宗の開祖である親鸞の教えには、徹頭徹尾他力本願の思想が流れており、ある意味では「恩恵論」的な思想とも言いえる。彼はその師法然の路線を引き継ぎ、念仏を唱えることこそ阿弥陀の本願であり、仏になる近道であるという師の教えをさらに発展させ、念仏を唱えることさえも人の功徳によるものではなく、阿弥陀仏の側から人間に差し向けられた本願のあらわれであると説き、その絶対的な他力性を強調した。彼の思想は、正に称名（「南無阿弥陀仏」と唱えること）という、人が往生するための最小限のわざさえも、仏のわざ、仏の悲願（慈悲の心）のあらわれにまで高めた。（キリスト教における恩恵論と仏教に見られる恩恵論的思想　A98 O.T.）

このことは、一神教的な考え方とも言えるだろう。
Buddhism did not teach of God as Creator, but it did teach the concept of the "Eternal Origin." Honen emphasized tariki, man's dependence on grace emanating from the Absolute Being. The belief in the "benefits of bounty" is a concept that is clearly evident in Mahayana Buddhism. For instance, the spirit of Buddhahood, which inspires the individual to strive toward enlightenment, exists in the mind of the individual. However, the awakening of this spirit is caused by a power that at all times transcends the human being.

The concept of tariki (reliance upon the power from others) that was spread through the teachings of Shinran, the founder of the Jodo Shin sect, can also be said to represent the theory of the "benefits of bounty." Shinran succeeded his Master Honen's path, and developed the teaching that reciting the Amitaba mantra was the true will of Amitaba and a shortcut to attaining Buddhahood (the state of enlightenment). Shinran went further to emphasize absolute dependence on others (tariki) by teaching that the recitation of the Amitaba mantra was made possible not through the virtue of the believer but through the manifestation of the true will of Amitaba as expressed to the believer. Shinran's doctrine is outstanding in that he elevates the mere act of reciting the Holy Name (namu amida butsu), the minimum exertion necessary for man's rebirth in higher realms, to the level of an act of Buddha and the manifestation of Buddha's spirit of mercy.

バハイは、輪廻はないとしている。
四苦八苦はいわば試練とも言えるのではないだろうか。
「苦労は買ってでもせよ」とか、「艱難汝を玉にす」という言葉もある通り人々は試練を乗り越えればよい結果が得られることを理解している。しかし試練を恩恵として受け入れることによって祝福が得られるという風には受け取ってはいない。

バハイの恩恵の概念

バハイでは、神は人間を愛するが故に創造され、恩恵を授ける。
神は唯一であり、万物を創造し、支配している。
「神は全恩恵の源泉である。」落穂集５番
God is the source of all grace.　Gl.

「今日こそは、神の最もすばらしい恩寵が人々の上に注がれている日であり、彼の最も偉大なる恩恵がすべての創造物の中に注入されている日である。」落穂集４番
This is the day in which God's most excellent favors have poured out upon men, the Day in which His most mighty grace hath been infused into all created things　Gl.

仏教が人間による悟りの追及というかたちを取っているのに対し、バハイの聖典は、恩恵を与える神からの視点で書かれている。この恩恵を与えるという宗教のあり方にはどういう意味があるのか。
この意味を調べたいと思ってインターネットを調べていて、京都のキリスト教研究者である市川喜一氏の文に目が留まった。

恩恵の支配

「人間が律法を守り行っているかどうかとは無関係に、救いとか祝福というよいものを与える神の態度とか振る舞いを、「恩寵」とか「恩恵」と呼びます。それは人間の側の価値とか働きとは無関係に、神の一方的な慈愛と働きによって形成される神と人との関わりです。イエスの宣教は、圧倒的な神の恩恵の現実を述べ伝えるものであったのです。イエスは「神の国」あるいは「神の支配」を述べ伝えられたのですが、神の支配の中身は「恩恵の支配」です。ユダヤ教における「律法の支配」に対して、いまや時が満ちて、圧倒的な神の恩寵が到来し、支配する時が来たという宣言です。」　市川喜一　キリスト信仰の諸相　Ⅱ－2
Reign of Bounty

> God's attitude of mercy and His generosity, which are bestowed regardless of whether we follow His decrees, are known as "grace" or "bounty". These terms refer to the relationship between God and humanity, which is the result not of mankind's value or endeavors, but of love and endeavor solely on the part of God. Christ's teachings stress the reality of God's overwhelming bounty. Although Jesus used terms such as "the Kingdom of God" and "Divine Rule", He made it clear that this was a "bountiful reign." In contrast to the Jewish concept of the "rule of (Divine) law", Christ proclaimed that the fulfillment of time had come and the era of God's overwhelming grace had appeared.
>
> Kiichi Ichikawa, *Various Aspects of Christianity*, Ⅱ–2

このように与えられる恩恵を恩恵として受け取る人間の姿を信仰といいます。「恩恵を恩恵とする」というのは、自分を全く無価値なものとして、恩恵だけを神と自分との関わりの唯一の拠り所とすることです。恩恵をひれ伏して受け取り、圧倒的な恩恵に支配されて生きている人間のあり方が信仰なのです。
律法の下にいる者は、神の裁きへの恐れという鎖に繋がれた奴隷のようなもので、内面から神の求めておられる生き方をすることができないのです。恩恵の下にいる者は、恩恵として賜る聖霊が神と同質の生命として、内側から神が求めておられる生き方を実現する力となってくださるのです。市川喜一　キリスト信仰の諸相　Ⅱ－2

このことはバハイに最もよく当てはまるような気がする。バハイの見解では、人類は全体として成人期に近づきつつあるとしているが、このことはどう関連しているのだろうか。神の恩恵にはもっと深い意味があるのかもしれない。人間は修行を積めば積むほど、自己が無になっていく。一方戒律を重んじる宗教では自己顕示を満足させる要素があるように思える。

戒律宗教は、律法を守ることが宗教の主な目的になっているもので、ユダヤ教、イスラム教、小乗仏教などがあげられる。

「どの宗教においても戒律とか律法はその宗教の本体そのものではないのに、いつのまにか、その戒律とか律法を守ることがその宗教そのもの、信仰そのものであると理解されるようになり、宗教なり信仰の変質が起こる。この傾向は人間の本性自体に内在している自我心、すなわち自己を立てようとする自己主張の本性から出るものと思われます。」　市川喜一

仏教の戒律

悟りにいたるのを助けるために戒律があるのであって、戒律は仏教の本体そのものではありません。戒律を守ることが仏教の中身であるかのように理解されたのが小乗仏教で、戒律を出家と在家の区別なく守ることのできる戒律に限定し、利他の精神を持って自己を確立しようとした大乗仏教が出てきます。比叡山を開いた最澄（天台宗）も２５０戒の廃棄を宣言して大乗戒を確立し、日本の仏教に決定的な影響を及ぼしたのです。市川喜一

苦難、災難の意味

日本人は、試練を克服するよう努力すればよい結果が得られることを理解しているが、それは自分の努力の賜物であり、恩恵とは捕らえていない。バハイによればこれも恩恵である。

バハイにおいては恩恵はどういうものなのか。

「おおわがしもべらよ。今、この世で、あなたの望みに反することが神により定められ、示されても悲しんではならない。なぜなら、この上もない喜び、天上の喜びの日々があなたのために準備されているからである。神聖で栄光に満ちた諸々の世界があなたの眼前に広げられるであろう。この世と次の世で、その恩恵と喜びを与えられ、常に下される恩寵の分け前にあずかるであろう。あなたは確実に、それらの恩恵のすべてを受けるであろう。」
落穂集　153番
O My servant! Sorrow not if, in these days and on this earthly plane, things contrary to your wishes have been ordained and manifested by God, for days of blissful joy, of heavenly delight, are assuredly in store for you. Worlds, holy and spiritually glorious, will be unveiled to your eyes. You are destined by Him, in this world and hereafter, to partake of their benefits, to share in their joys, and to obtain a portion of their sustaining grace. To each and every one of them you will, no doubt, attain.　Gl. p. 329

「わが災厄は、わが慈悲である。外見は火であり、復讐である。しかし内面は光明と慈悲である。」かくされたる言葉　アラビア編51番
O son of man! My calamity is My providence, outwardly it is fire and vengeance, but inwardly it is light and mercy. HW

「最も多くの苦難を経験するものが、すばらしい完成の状態に到達する。試練こそは神からの恩恵であり、その恩恵に関して、我々は神に感謝しなければならない。」パリ講和集
Tests are benefits from God, for which we should thank Him. Grief and sorrow do not come to us by chance, they are sent to us by the Divine Mercy for our own perfecting.

'Abdu'l Baha, *Paris Talks*, p. 66～67

聖書のヨブ記に、豊かで信頼されるヨブに神は富を取り上げ10人の子供を一度に死なせ、さらに悲惨な悪

性の腫れ物で苦しませたとある。ヨブは死ぬことさえ許されずに苦しむ。ヨブは神を恨みはしないが、嘆き悲しむ。この段階ではまだ、バハオラの言われる恩恵という概念はないようである。もしヨブがバハオラの言われる恩恵の意味を知っていたならば、感謝しながら耐えたことだろう。

善人に試練が次々襲いかかり、悪人がのうのうと暮らしていることも往々にして見かけるが、バハイによれば、これも善人にとっては恩恵ということになる。
この他、恩恵は殉教、布教、奉仕、犠牲、寄付　慈善、善行，断食などによっても与えられる。

慈悲、愛、救いという概念は、恩恵の概念に含まれてしまうのではないか。

死に対する見方

近頃は大規模な自然災害や戦争の犠牲になる人も少なくない。平和な日本でも思わぬ事故で命を落とす人も多い。こうした犠牲もバハイでは恩恵と考えるべきなのだろう。

仏教の見解では、事故死と天災とは違っている。

事故死：　事故は、歴史的、地理的な人間のあらゆる業（行為）が原因となり、種々の縁によって、大事故という結果になって現れる。責任はすべての人間にあり、共に被害者でありかつ加害者である。よってこの苦難の悲しみの場をともなる場として、この苦難を安らぎに転ぜんためにすべての人が協力し反省し改革に参加すべきである。

天災による死：天災は、宇宙の自ずからなる働きの原因と縁によって起こると思う。人間の分別ではなぜ起こるのかはわからない。仏教は、すべての現象をありのままに見つめ（般若すなわち智慧）事実をそのまま受け止めるので、人間の分別での意味付けをしない。（駒原教博氏）

仏教では天命として人の寿命は定まっているとする。

死に対するバハイの見解

「われ死を汝への喜びの使者とした。汝いかなれば死を悲しむや。」（かくされたる言葉アラビヤ編 32 番）
O son of the Supreme!
I have made death a messenger of joy to thee. Wherefore does thou grieve?　　HW

バハイの見解では、人の死は事故死も天災による死も恩恵ということになる。こういう恩恵を考えるためには、どうしても霊魂は不滅であり、次の世がなければならない。仏教では、一応霊魂も次の世もないことになっているので、多くの日本人にとってはこうした概念の恩恵は理解しがたい。

バハイ信教では魂の存在がはっきりと述べられている。

「誠に人間の唯一の栄光は、その霊魂にある」バハオラ　死後の生 p. 13

魂について

個々の人間は魂が受精卵と結合するときに始まる。心を磨こう　p. 30
The individual has his beginning when the soul coming from these spiritual worlds, associates itself with the embryo at the time of conception.

Reflections on the Life of the Spirit, p. 30

人間の魂は受精のときに存在し始める。　万国正義院　*Lights of Guidance*, p. 346
The soul of man comes into being at conception….

The Universal House of Justice, *Lights of Guidance*, p. 346

「科学は、単一の要素（単一とは結合体でないことを意味する）は破壊できず、不滅であることを証明した。魂は要素の結合体ではなく単一の要素であるから、その性質上、消滅することはない。魂は、一つの分離できない実体からなっているので、分裂や破壊をこうむることはなく、したがって消滅するこ

ともない。」(パリ講和集　p. 125～126)
The soul is not a combination of elements, it is not composed of many atoms, it is of one indivisible substance and therefore eternal. It is entirely out of the order of the physical creation; it is immortal!

'Abdu'l Baha, *Paris Talks*

「死後の魂の特質は決して叙述され得ず、また人間の目にその全性質を明かすことも適当でなく、許されてもいない。」落穂集 81 番
The nature of the soul after death can never be described, nor it meet and permissible to the eyes of men. Gl. No. 81

「まことに魂は神のしるしであり、天国の宝石であり、その実態は最も学識ある者らも理解し得ないものであり、その神秘はいかに鋭敏な心意も決して計り知ることを得ない。」落穂集 82 番
Know, verily, that the soul is a sign of God, a heavenly gem whose reality the most learned of man hath failed to grasp, and whose mystery no mind, however acute, can ever hope to unravel.
Gl. No. 82

来世
　バハイでは来世があり、この世は来世に入るための準備をするところであり、来世に入るために人間として成長しなければならないとされている。それには美徳を身につけ、この世を超越しなければならない。試練は人間としての成長を促すものであるから恩恵である。

「人間は、その生命のはじめの頃、子宮という世界の中で胎児の状態であった。そこで胎児は人間の存在に必要な能力や才能を与えられた。 この世で必要なさまざまな能力や力は、そのように限られた状態の中で与えられたのである。・・・したがって人間はこの世で次の世の準備をしなければならないのである。・・・・子宮の世界で、この世に必要なさまざまな能力を身につけて準備するように、次の世における清らかな生活に不可欠なさまざまな能力をこの世で潜在的に習得しなければならないのである。」アブドル・バハ　*The Divine Art of Living*
In the beginning of his human life man was embryonic in the world of the matrix. There he received capacity and endowment for the reality of human existence. The forces and powers necessary for this world were bestowed upon him in that limited condition. Therefore in this world he must prepare himself for the life beyond. Just as he prepared himself in the world of the matrix by acquiring forces necessary in this sphere of existence, so likewise the indispensable forces of the divine existence must be potentially obtained in this world.

'Abdu'l-Baha, *The Divine Art of Living*

魂は、次の世でも進歩し続ける。 しかし、いかに進歩したとしても人間は神にはならない。

「魂は肉体より分離後、年代と世紀のめぐりもこの世の変遷と運命も変え得ない状態で、神の面前に達するまで進歩し続ける。」　バハオラ　落穂集８１番
Know thou of a truth that the soul, after its separation from the body, will continue to progress until it attaineth the presence of God, in a state and condition which neither the revolution of ages and centuries, nor the changes and chances of this world, can alter.

Baha'u'llah, *Gleanings* No. 81

「人間の精神が肉体から離れた後、神の世界で進歩するには、主の恩恵と恩寵のみによるか、あるいは他の人のとりなしや誠実な祈りによるか、あるいはその人の名のもとに行われる慈善や、重要な善行による。」質疑応答集 p. 264
The progress of man's spirit in the divine world, after the severance of its connection with the body of dust, is through the bounty and grace of the Lord alone, or through the intercession and the sincere prayers of other human soul, or through the charities and important good works which are performed in its name.　　SAQ p. 240

天災や人災で亡くなった人にも恩寵により魂の進歩が約束されている。

「幼くしてなくなった幼児は、神の恩恵の保護のもとにある。」質疑応答集 p. 264
These infants are under the shadow of the favor of God . SAQ p. 240

囚人として獄に繋がれ、すべてのものを奪われたバハオラが、信者にすばらしい報酬と祝福を伴う恩恵を約束されている。

「おおアーマドよ。この書簡を暗記し、日々それを唱えよ。このことを怠るな。まことに神はこの書簡を唱えるものに百人の殉教者の報いと、現世と来世にわたる奉仕を定められた。これらの恩恵は私のほうからの恩恵として、また私のもとからの慈悲としてあなたに与えられた。それによりあなたが感謝する者の中に数えられんことを願う。」バハオラ　アーマドの書簡
Learn well this Tablet, O Ahmad. Chant it during thy days and withhold not thyself therefrom. For, verily, God hath ordained for the one who chants it, the reward of a hundred martyrs and a service in both worlds. These favors have We bestowed upon thee as a bounty on Our part and a mercy from Our presence, that thou mayest be of those who are grateful.

「来世の報酬は、永遠の命と、神の完全性、永遠の恩恵と不滅の幸福です。来世の報酬はこの世を去った後の精神界で獲得する完成と平和です。一方この世の報酬は、この世で実現される真の輝かしい完成であり、永遠の命の根源です。それこそ存在の進歩に他ならない。・・・来世での報酬は、神の国における平和、精神的美点、さまざまな精神的贈物であり、心と魂の願いを獲得し、永遠の世界で神と会合することです。同じように来世での罰つまり、来世での苦しみは、神の特別な祝福と絶対的恩恵から締め出され、最低の存在状態に落ちることです。これらの神の恵沢を奪われている者は、死後も存在し続けるとはいえ、真理の人から見れば、死んだものと見なされます。」SAQ　p. 247

仏陀は霊魂については答えない（無記）といわれたそうだが、日本の仏教では魂はない、霊魂不滅もないとしてきた。人々は、人の死は動物の死と同じで死んだらおしまいと思っている人が多いように思える。そこで、生きているうちにご利益、すなわち恩恵を受けたいとさまざまな望みを神社仏閣で祈る。

どういう理由で霊魂の存在を否定するのか。
仏教の基本的な立場は、無我説にあるので、輪廻する主体や中有の状態にある霊魂は否定されるべき対象であった。なぜなら仏教において、解脱というのはこのような主体（我）もしくは霊魂的な存在から自由になることを意味したからである。無我の立場によって、我と霊魂の存在を否定することになったからである。 山折哲雄　仏教とは何か。p. 97

平安時代の源信は、浄土教を定着させた第一人者で、地獄と極楽についての記述で知られる「往生要集」を著した。その書の中では霊魂について触れてはいないが、現実の念仏集団の死者儀礼では、霊肉の分離と霊魂の浄土往生という考えを主張した。以後日本の仏教は体制としてこのような考えを継承していた。山折哲雄　仏教とは何か p. 100

日本ではこの二つの相反する考えが長く続いてきたようだ。

仏教では次の世はないというが、阿弥陀如来がおられる極楽浄土はあるという。
極楽浄土は西方浄土ともいい、はるかかなたにあり、すべての苦から解放されたユートピアである。そこに人間はどういう状態でいるのかはわからない。ただ信じさえすればよいということである。人々はひたすら念仏を唱えさえすれば極楽に入れてもらえると告げられている。極楽でも精進を続ければ、仏になるというような考えがある。

極楽浄土という思想は、阿弥陀如来という一つの神に救いを求めていることになるのではないか。

バハイの次の世はアブハの王国と呼ばれ、人間の魂はそこでも完成に向かって進歩しつづける。 次の世は、すぐにでも死んでもいいと思えるようなよいところである。人々は、死後、親しかった人たちと再会するとよくいうが、仏教的にはそうしたことはあり得ないはずである。しかしバハイの教えでは正に

その通りのことがあるということである。この世と次の世は離れた存在ではなく、ごく近くにあり、死んだ人たちもこの世に影響を及ぼしているとしている。

日本の仏教の現状と課題

日本の仏教は、葬式や墓を中心に成り立っており、亡くなった人の霊を位牌に込められるとして、葬式では位牌に向かってお経を上げる。
また家では仏壇に位牌を置いて拝む。またお盆は、先祖や亡くなった人の魂が戻ってくるとして迎え火を焚き、また送り火を焚く。お盆には日本古来の風習に仏教も参加したような形で、お寺でも施餓鬼法要等、盆の行事をする。
その他彼岸、正月、法事にも追善供養としてお経を上げる。そのお経はほとんど意味がわからない。位牌、宗教行事、極楽浄土等は、後世の宗教者が取り入れたもので、仏陀の教えではない。また、御霊、霊界、霊前、亡霊、鎮魂、慰霊といった霊魂を顕す言葉もよく使われる。

日本人の多くは、亡くなった人のために仏壇で毎日のように祈る。これはバハイで死者の魂の進歩のために祈りを捧げるのと共通する。
魂と次の世を認めると、仏教もバハイと共通する部分があるのではないか。

こうした背景に対してなのか、最近の仏教界では、霊魂はあることにしようということになったようである。しかしその実体については意見が分かれ、結論はでていないそうだ。

仏の教えはよい事をして悪いことをしないという道徳律を持っている。
善は、六波羅蜜：布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧
悪は、十善戒：殺生、偸盗、邪淫、妄語、綺語、悪口、両舌、慳貪、瞋恚、邪見
霊魂や次の世がないとしたら、こうした善行を積む意義がなくなる。

日本の仏教は、戒律を重んじる戒律宗教とはならなかったという利点がある。教義や他の宗教に対して寛容である。神道や古来の民族宗教を取り込み、日本独特の変容を遂げている。日本人の思考はしなやかというか柔軟性があるように思われるが、こうした歴史的な事実も影響しているのではないか。

一般の人々の信仰心は、輪廻を強調されるわけでもなく、戒律を強制されることもなく、定期的に寺へ行くこともなくいたって気楽なものである。一方、狂信的でない利点もあるように思える。

日本の仏教は、霊魂はないとしながら、霊魂があるかのような行為があり、矛盾を含んだまま、長い時間が過ぎた。もうこの課題に決着をつけなければならない時に来ているのではないだろうか。

参考文献

落穂集　バハオラ
アブドル・バハの質疑応答集
パリ講和集　アブドル・バハ
かくされたる言葉
魂・心意・精神　ヘンリー・ワイル著、コールドウエル・本子訳　ベスト社　1998年
世界大宗教辞典　平凡社
岩波哲学思想辞典　岩波書店　1998年
仏教とは何か　山折哲雄　中公新書　1993年
善人がなぜ苦しむのか　小阪国継
倫理と宗教　勁草書房
世界の宗教がわかる本　ひろさちや
ブッダの教え　仏教2500年の流れ　山折哲雄　集英社2001年
仏教「死後の世界」入門　ひろさちや　講談社α新書2002年
仏教の常識　ひろさちや　徳間文庫　1988年
現代人の仏教　鎌田茂雄　講談社学術文庫1998年
市川喜一　キリスト信仰の諸相　Ⅱ－2